

18世紀ブリヤート人の汎モンゴル観念における仏教的要素

ツォンゴール・B. ナツァグドルジ

はじめに

モンゴル人の世界の住人であったブリヤートは、1727年に、全く異なる文化的伝統を持つロシア帝国支配下に入った。このブリヤート達が、このような自分達には異質な帝国において自分の状況をどう理解していたか、また清朝支配下に入った他のモンゴル人をどう見ていたか、という問題がある。本報告では、モンゴル国立文書館の新史料を用いて、これら諸問題に対するいくつかの回答を試みたい。

1.1. 主僧ダムバダルジャー・ザヤエフと清朝との交渉（1759-1765）について

露清間の国境策定が行われた後も、新たな清・ジュンガル戦争が勃発すると、雍正帝はハルハ王公から任命する副将軍（*ma. aisilara jiyanggiyūn*; *mo. tusalayči jangjun*）職を設けた。その中の1人に、多羅額駙（*ma. doroi efu*）ダンザンドルジ（*mo. danjindorji*）がいた。彼は1688年の露清戦争でハルハの軍を率いたシディシリ・バートル・ホンタイジの子であった。ダンザンドルジの子ドルジセブデン（*mo. dorjisebden*）は、怡親王胤祥の第四女を娶った。この2人から生まれたのがサンザイドルジ（*mo. sangjaidorji*）であった。北京の皇宮で教育を受けた彼も皇女を娶った。

1756年、更迭されたトゥシエート・ハン・ヤムピルドルジの代わりに、サンザイドルジが副将軍の任に就いた。チングンジャブの反乱の際に、モンゴル人をロシア皇帝の臣民として受け入れてもらうことについて、ロシア帝国の国境官憲と2世ジェブツンダムバ・ホトクトをはじめとするハルハ王公達の交渉が行われた。この交渉を企てた者達はサンザイドルジを親清派として恐れ、彼のいないところで交渉を進めようとした。

1765年初頭のウリヤスタイ定辺左副将軍ツェンゲンジャブの上奏では、公式にキャフタ貿易を中止したにも関わらず、サンザイドルジが対露貿易を継続していた、と報告された。乾隆帝はサンザイドルジを更迭し、彼の王号を剥奪し、北京に軟禁した。この事件の過程において、ロシアのブリヤートに関連するある事件が明るみに出た。1765年7月、サンザイドルジは北京に送られる前に、フレーに派遣されていた理藩院官僚のハラチン貝子フトゥリング（*ma. hūtingga*）¹に、清朝臣民として200人のブリヤートを受け入れることに関して、ブリヤートの僧ツォルジ・シレート・ダムバダルジャーと交渉していることを伝達した。これについて史料には、乾隆24年（1759年）6月にハムバ・ラマ・シャグダル²を連れてロシアの准将³と交渉を持ったサンザイドルジがキャフタにいた際に、ガブジ・ツォルジ・ダムバダルジャーが来てシャグダルと会見したこと、昨年秋にニルバ・ソドバ⁴がハル

¹ハラチン旗ザサグ。ベイセ。額駙。理藩院官僚を務めていた。

²フレーのハムバ・ラマ。サンザイドルジの近親であり、フレーのハムバ・ノモン・ハン・ジャムバルドルジの兄であった。

³ヤコビ・ヴァルフォロメイ・ヴァレンチノヴィチ（1693-1769）。1740-68年にセレンゲの准将、司令官。国境関係諸事を管轄した。1756年に、ロシア臣民としての受け入れに関してモンゴル王公と交渉を行った。

⁴アバガド・ツォンゴールの出身。ダムバダルジャーの兄ザサ・ザヤエフの長男である。

ハの卡倫の僧チョイドグのところに来て「宗教と教義の国に帰したいと以前あなたに言った。我ら 2 人の兄弟には思いは一つである」という兄の言葉をハムバ・ラマに伝えるよう言ったこと等が記されている⁵。フトゥリングに呼ばれたソドバは、自分がダムバダルジャーの甥、ツォンゴル・オトクのザイサンの子であること、ダムバダルジャーは露清関係の悪化に鑑み、ツォンゴル・オトクが清朝臣民として受け入れてもらえるよう要望を出した場合の清朝の動きを調べるよう派遣されたこと等を述べた。ダムバダルジャーがこう決意した理由について、史料には「以前は我らのオトクでは子を僧に出すことを自分の希望によって決めていたのに、近年ロシア人は我々の希望で僧を出すことを禁止している。前の僧が老いれば、我らの宗教はなくなってしまう」⁶とある。

フトゥリングは、彼らが本当に清朝に帰順したいならば皇帝は受け入れるであろうという保証と共にソドバを送り返した。その一方で、今後の指示を仰ぐべく、皇帝へ上奏文を送った。乾隆 30 年 8 月 19 日の皇帝の上諭には、「ダムバダルジャーらが人を送ってこないならばそのままにしておき、人が派遣されて来た場合には、皇帝は帰順者を受け入れるということ伝えるよう」とある⁷。しかし、この問題に関するこれ以上の情報は、現在のところ発見できていない。

1.2. ブリヤートの最初のバンディダ・ハムバ・ラマ・ダムバダルジャー・ザヤエフ

ダムバダルジャー・ザヤエフは、ブリヤートの著名な教養ある僧であり、仏教の振興に努めた。彼は、ツォクト・ホンタイジの孫、オキンの支配下にあったツォンゴルの出である。1689 年にロシア帝国に帰順したツォンゴル達は、ジュンガルの脅威からロシア帝国に帰順した他のモンゴルと異なり、清朝支配から逃れようとしたのである⁸。オキンは、ロシア皇帝への忠誠に対して、ザバイカル・ブリヤートの主タイシの称号をロシア皇帝から授与され、ホリ・ブリヤートをもその支配下に入れた⁹。オキンの長男で跡継ぎのロブサンは露清国境策定に関与した¹⁰。これらの人々により、ロシア帝国はセレンゲ及びシルカ河流域で地歩を固めることができたのである。

⁵ МУУТА, М-1, Д-1, хн-2843, л.46

⁶ МУУТА, М-1, Д-1, хн-2843, л.46

⁷ Фонд исторических документов, Институт Истории АНМ. Д-1, хн-118.

⁸ Б.Нацагдорж. К проблеме этногенеза цонголов. // ActaMongolica. Volume 6. с.323-339. Улаанбаатар, 2006.

⁹ Русско-китайские отношения в XVII веке. 1725-1727. Том II. Москва, 1990. с.592

¹⁰ Русско-китайские отношения в XVIII веке. Документы и материалы. 1727-1729. Том III. Москва, 2006. с.470

チョイ・ラブジョイが来てあるブリヤートの逃亡者について述べたことを記している。この逃亡者はハラ河のシャビナル長だと称した。尋問に対してこの逃亡者は、ホリ・ブリヤート出身であること、名前がジャムツォで 29 歳であること、イルクーツク総督の徴兵指令によってオナガチという人の息子の代わりに兵役に送られたこと、兵役を受けた若者は髪を切られてバイカル湖に浸されて首に十字架をかけられたこと、自分は仏教徒であるため兵役にはいられずに仏教の師トンガラグ・シレート・シラブ、ブリヤートの官吏エリンツェイ・タイシらの言葉によって逃亡してきたこと等を述べた¹⁵。この報告の草稿版には、彼の師シラブが洗礼を受けても仏教を忘れぬよう戒を授けたこと、一昨年（1775 年）の 8 月に逃亡したこと、タイシや師と相談して「ゲゲーンの国」に行くよう命じられたこと等が記されている¹⁶。サンザイドルジは皇帝に、彼がハルハの遊牧に慣れたため、彼を引き渡さぬよう主張した¹⁷。皇帝は、3 月 25 日の上諭において、信用できる人を付けてジャムツォを北京に送るよう命じた¹⁸。

2.2. ポンツァグ事件（1778 年）

乾隆 43 年（1778 年）10 月 28 日、サンザイドルジは東部 2 アイマグの卡倫の長であるエリンチンドルジとゴンチグツェレンから、クダリカ倫で捕縛された 2 人のブリヤート逃亡者に関する書簡を受け取った。その書簡には、彼らがヒロクの地に住むポンツァグとその妻ツェツェグであること、ロシアにおける増税から逃れてきたこと、偉大なるハンに帰順してゲゲーンに礼拝するために来たこと等が記されていた¹⁹。卡倫の長は彼らをフレーに送付するよう命じた。10 月 28 日、彼ら 2 人はフレーで、官吏レブ、筆帖式ユンシャン、バダクシャンによって再び取り調べられた。その後、サンザイドルジは 2 人を北京に送るよう皇帝に要請した。当時、露清関係が悪化し、キャフタ貿易が停止されていたためである²⁰。

この取り調べから、ポンツァグがアシバガト（*ma.asibagat*）・オトク出身であること、ロシア人がブリヤートの 1 家庭から年に銀貨 2.5 を徴収していることなどが分かる。フレーの支配者たちは、キャフタ貿易中止後のロシア人とブリヤートの関係に興味を持っていたようである。ポンツァグの供述では、ブリヤートの状況は悪くなり、多くの者が食料の資金を持たないとのことであった²¹。半年後の 3 月に、サンザイドルジは皇帝に、彼らを北京に送るよう裁可を要請した。

地方官と異なり、首都の官僚は非ロシア人のロシア帝国臣民によくはない印象を抱いていたことが、以下の史料からわかる。そこには、「お前はロシア臣民なのになぜロシアの服を着ないのか？—これにポンツァグが答えるには、ブリヤートはロシア辺境で遊牧しています。ロシア人は我らブリヤートには拡大できず、私たちはロシアのことを知りません。我らブリヤートは皆モンゴル人です」と記されている²²。これにも関わらず、北京の官吏は彼らを、従前のロシアからの逃亡者と同様に扱った。史料には「ポンツァグとその妻はロシ

¹⁵ МУУТА, М-1, Д-1, хн-324, л.10-13

¹⁶ МУУТА, М-1, Д-1, хн-2940, л.3

¹⁷ МУУТА, М-1, Д-1, хн-324, л.13

¹⁸ МУУТА, М-1, Д-1, хн-324, л.15

¹⁹ МУУТА, М-1, Д-1, хн-330, л.391-393

²⁰ Курц Г.Б. Русско-китайские сношения в XVI, XVII и XVIII столетиях. Харьков, 1929. с.319

²¹ МУУТА, М-1, Д-1, хн-333, л.292-298

²² МУУТА, М-1, Д-1, хн-3036, л.12

ア臣民である。以前、ジャムツォをロシア人の例に従って処置した。ロシア人の例に従い、彼らを四川の成都に送るべきである」²³とある。結局、乾隆帝の上諭によって、乾隆 44 年（1779 年）5 月 19 日に 2 人は成都に送られた。以上の経緯から、上述のジャムツォとこのポンツァグが、八旗に編入され、家奴とされたことが分かる。ブリヤートの逃亡者が遠く中国内地に送られた理由は、ロシア側から逃亡者の隠ぺいを追究されないようにするためであろうと推測される。

ジャムツォ、ポンツァグの供述では、清朝統治下のモンゴルがゲゲーン（ジェブツンダムバ・ホトクト）の住む土地であり、それゆえ仏教が広まっている、と強調されていた。彼らは 2 人供ブリヤートの中でも下層の出身であるから、彼らの主張は一般のブリヤートの考えを反映したものであろう。

3. モンゴル性の要素としてのブリヤートにおける仏教

ハルハ部の代表者達が 16 世紀以降仏教徒になっていったのに対して、ロシア帝国支配下に入ったザバイカル地域では、仏教よりもシャマニズムの信奉者の方が多かった。しかし、仏教は宗教学的にはシャマニズムよりも発展し、これがブリヤートがロシアへの同化に対抗するのに助けとなった。このことが、1727 年以降、モスクワのキリスト教化政策に対してブリヤートで仏教が普及、発展した大きな理由の 1 つであろう。このことは、ブリヤートが洗礼を受けたブリヤートを「ロシア人になった (*mo. oros boluysan*)」と表現することによく表れている。逆に、仏教徒である人はモンゴル人として規定される。

つまり、ブリヤートは、モンゴルの仏教の主たるジェブツンダムバ・ホトクトを信仰している限りにおいて、自分をモンゴル人であると見なしていたことになる。また、清朝もこれと同様に見ていた。

ブリヤートは仏教を、モンゴルのアイデンティティに関わる要素として知覚していた。また、それは清朝支配下に入ったモンゴル人も同様であった。ブリヤートは「ロシア人になる」ことを望まず、仏教を選択した。仏教は、彼らの「モンゴル性」を強固なものにするのである。

おわりに

ロシア帝国は 18 世紀初頭にバイカル地域に地歩を固め、清朝との国境を策定した。これは、現地のモンゴル及びツングース系の人々の皇帝に対する忠誠の賜物であった。

1689 年の条約の一項目には、ロシア当局は洗礼を強要しない、というものがあつた。彼らは洗礼をロシア化と同一に見ていたのである。それゆえ、同化に対抗して、ブリヤートの支配階層は、意図的に仏教を選択し、結果として仏教の普及に協力した。清朝支配下の隣のモンゴル人が仏教徒であったため、ブリヤートにとっても仏教は彼らの「モンゴル性」を示すものになった。

かくして、宗教的指導層が、仏教信仰に対するロシア当局からの脅威を感じた時には、清朝皇帝の庇護を求めようとしたのである。

²³ МУУТА, М-1, Д-1, ХН-3036, л.12